美濃国郡上郡鷲見村字会津

　　　土地支配人　　太郎右衛門

　**嘉永5年**正月15日　　姓名の改正の際

　右は最も古い屋敷であるので古屋と改姓し、それより古屋太郎右衛門という

大元祖　敬願寺由緒伝記

　　　　曇光山　敬願寺　覚成坊

　　　　　鷲見加賀守頼保

　　　　　山口才三郎　　　伝記

　昔々、鷲見の謂われを探るに、神武天皇30代敏達天皇時代(今日より1414年前)、大和国殿上人藤原少将満近の子孫藤原左衛門尉が武者修行に出て諸国を遍歴し、その中で美濃国武儀郡(斉衡2年より郡上郡となる)飛騨国の境まで来た時、雲ヶ嶽の麓に霞ヶ洞と言うところで休憩し昼寝していると、夢なのか現実なのか、老人が来て、この地は由緒があるから住むべしと言って、夢が醒めた。

　藤原左衛門尉が思うに、このような不思議な夢を見るものだろうか。このような深山で夢を見るのは面白い。元来勇猛剛胆な人であるから、ここに住み、居を構える。山の麓に柴の庵を建て、山畑をして暮らした。飛騨国の某から妻を迎え、一子を設け山の麓に住んだという由緒があり、山口才三郎と名乗った。その頃は法相宗長瀧寺に属していたが、天長5年に長瀧寺が天台宗に改宗なされ、才三郎盛長は、その後白山如理大権現十一面観音自在尊を日頃から信じていたので、正応3年長瀧寺白山中ﾉ社を普請した。これが出来たその社の内、養老7年、44代元正天皇の時代に、奈良の都より下りいただいた元正天皇の一刀三礼の十一面観音が、ある夜、才三郎の夢のお告げで「長瀧寺へ迎えに来なさい」と見て、夢が覚めた。才三郎は大変ありがたい夢であると思って、すぐに長瀧寺へ一目会いに行って十一面観音の祠に立ち寄り、礼拝したが十一面観音様は現れず不審に思い、お堂の縁側に出ると縁側に十一面観音様が現れ、才三郎はその像を拝み奉り礼拝して敬虔にお祀りして家に帰った。

これが鷲見村の氏神である。

後に長龍寺の配下となりました（長滝寺に戻し、今は長滝寺にあって鷲見村にない）

時に大宮天皇のご次男時丸様が承久3年にお生まれになりました時、正月2日夜、夢に「これより東北に鷲の巣がある。これはまさに正夢である。探してみよう」と勅命がありました。武蔵権守はお供の人34人を連れ、東北を目指して行くと美濃国の長良川にさしかかる。その時鷲の羽が流れてきた。それを取り上げて見ると四尺七寸もある鷲の大石打ちという羽根であった。白い羽に紺字で鮮やかに八幡という文字がある。不審に思い、ここから山奥に鷲の巣があると思うことは当たり前のことである。しかし、八幡という文字が毅然たる事は神霊のことと思い、この羽根を携えて郡上に登る。東乙原というところで休憩したとき、遙か向こうの虚空を見ると、大鳥が舞飛んでいるのを見て鷲であるというと、鷲ではなく、鴻であるとい言った。それより東乙原に、鴻ヶ洞と言うところであった。武蔵権守はさらに山奥へ進み、野原である郡上八幡の小野村で宿をした。それより上之保、明方と手勢を分けて進むと、所持してきた鷲の石打羽根を八幡宮の神霊であるからこの所に残し、鎮守としなさいと、その所の岩穴に差し置かれた。小野村では、百姓衆が集まって氏神と祠を作り、これが小野村八幡宮のご神体である。

　その頃から、時々まれな良きことがあり、武蔵権守が上之保を訪ね登ると、徳永村でいろいろ尋ね探し、八日間逗留したので八日町という。また同様に二日間逗留し探したので二日町と名付けたという。

　そこから別々に登り、飛州境に至り岩高村の小左衛門という者の所へ宿泊してその近辺の山や洞を探すと、霞ヶ洞という所へ着いた。そこには山口才三郎という者が柴の庵を結んでいたので、彼に鷲の巣を探し求めてきたことを細かく話した。山口才三郎が申すには「この山の頂上には雲ヶ嶽という高山がある。もしかしたら、ここにいるのかも知れない」と言ったので、ここに足を止めて探すと、霞ヶ洞に小城・大城という二箇所に陣屋を張り、七日あまり止まり、日々、才三郎の案内にてあちらこちらと探した。その所を今でも小城・大城という。しかし、鷲の巣を探していると岩高村小左衛門が見舞いに来て、長いこと捜索されたご苦労は計り知れません、ひとまず私の家でお戻りなされご休憩くださいと言った。武蔵権守は山口才三郎に篤い信頼を置いていたので、小左衛門方へ一緒に帰った。山口才三郎は静かに考えて各所を見回し尋ねると、ある日に昼四ﾂ時頃と思われるとき、大清水という所へ鷲の大鳥水を飲みに来たのを見て、この先を考えると雲ヶ嶽の頂上へ飛行し、それから毎日、大清水の方を注意していると、いつものように鷲水飲みに来ること二～三回に及び、そのどこへ行くのか注視していると雲ヶ嶽の頂上に鷲の巣があると思ったので、山口才三郎は急いで岩高村の小左衛門方へ来て、武蔵権守へそのことを報告すると大変喜ばれ、権守様と山口才三郎は同道して霞ヶ洞へ登られた。すると鷲の声がかすかに二度聞こえたので勇んで駆け登った。今ではその所を二声という。そこより六・七丁登るとまた二声大きく聞こえたので、皆は喜びました。今、その所を大二声という。さらに四・五丁登ると、鷲の羽根が落ちていたので、拾い上げて前へ進んだ。今、その所を羽落という。そこから暫く登って休息して烏帽子を脱ぎ、木の枝にかけられた。今、その所を烏帽子掛という。その後、才三郎方へ行き休憩を取られた。各自は武具を、武蔵権守は大弓を置かれた。手勢を揃えて才三郎が案内して雲ヶ嶽へと心弾ませ、深山なれば藪を切り払いながら登ると、遙かを見れば鷲の巣と思われるものが大木の中に鳥の巣の形である。間近に近く登りってよくよく見ると、鷲は人が来るのを伺っており、傍の枝に止まって見ている。武蔵権守はすでに大弓に矢をつがいぎりぎりと引き絞り、ちょうと放つと、すぐに矢先に鷲がかかりながら、鷲は人夫をめがけて飛びかかり掴まんとするところを、各自は太刀を引き抜いてこれを刺し殺す。妻鳥を射ると、雄鳥も続いて飛来して来るのを以前に才三郎より聞いていたので秘蔵の太刀を帯びていたため、抜く手もみせず、何のことなく鞘にもどす。ついに二羽を討ち取り、鷲の巣を手勢の者に子を生け捕られると、一同は大変喜んだ。岩高村の小左衛門はそのことを聞いて迎えに来て喜んだ。皆は小左衛門の家へと行き、そこで休息した。

　それより岩高村を向鷲見といい、才三郎がいたところを鷲見村といった。その近在の八ヶ村を鷲見郷という。

　このようにして武蔵権守は鷲鳥二羽子鳥を生け捕りにして籠に入れ、急いで都へ飛ぶがごとく帰り、天皇へ事の次第を申し上げ、鷲を献上した。天皇は大変喜ばれ、建長三年月一三日（88代後深草天皇の時代）、武蔵権守へ褒美として家名を鷲見加賀守頼保と下された。昔のことで美濃国芥見庄鷲見八ヶ村並びに川東を永代知行1623石として下され、御役料として向鷲見村に一城を築けと申し下され、御普請奉行を稲葉大膳に仰せつけられました。同年8月3日に御城が出来上がり、鷲見加賀守頼保が居城となった。そして、山口才三郎をお呼びになって、その方の働きがこの度は格別であって、仕事（任務）が成功した。その上、山口才三郎は昔から地元の者であるから大屋と名乗りなさい。今後は手前同様、鷲見大屋九兵衛と改め、第一番独礼申し付け、御紋を角剣菱御免と下し置かれ、印判も大屋として用いるように、格別の取り計らいをいただいた。（注には山口才三郎を大屋九兵衛と改めるとある。）

（遠藤但馬守が五町の長渕で船遊山しているところへ、鷲見大屋が通りかかるのを見て船に呼ばれた。）この部分欠

　舟に呼び出されてお酒を下さり、数杯頂戴しました。早々に御免下さいと申しましたが、もう一つ仰せられましたが共に辞退をいたしますと、その方の望みの物を肴に置きたいと大盃をくださいました。それならばこの淵を下さいと申し上げると、その通りこの淵を差し上げようと応せられ、近習が大きな盃にお酒を注いたので、有り難くそのお酒を頂戴して飲み干し、さらにこの淵を大屋ヶ淵と名付けくだされました。それよりここを大屋ヶ淵という。

　その夜、その淵で遠藤様が疲れを癒やすために夜網などをしていたので、鷲見大屋がその所へわざわざ行き、この淵は今日から我ら殿様から頂戴した淵だから夜編みするとは何事ぞと言って石を投げて帰る。

　その翌日、遠藤様へお礼に上がり、お目通りして申したことは「昨日、私に頂戴しました五町の淵にて夜網をしている者がいました。なお、私は石を打ち帰ったと申し上げれば、それは私であるとおっしゃり、これは危ないことである、石が当たらないで大変良かったと言った。殿様が言われるには、「夜網は私の慰めであるから反省する。その代わり夜網をする度に鮎を差し上げようと仰いました。それからは夜網をされるときには、鮎を53匹づつ足軽付き家来に持ち下された。この淵、五町のお淵を大屋淵という。

　その後、遠藤右衛門常春様の御嫡子が誕生の時、その節、鷲見大屋ご機嫌伺いに行くと、良いときに来た、生まれてきた子に名を和付けるように仰せになり暫く相考え　岩は堅きもの、松は常盤に木を千代に重ね目出度きものなれば、岩松丸と御名を付け、自身に被っていた頭巾を脱ぎ、これを岩松丸へ着せ置きなさいとご命令なされました。それより大屋はご祝儀として「国継」の刀を差し上げると、大変喜び感謝され、鷲見大屋へ黒鹿毛の馬を一匹くだされた。打節　岩松丸へ着せた頭巾を見ると洗って綺麗にかぶらせてあった。大屋が申すには頭巾を垢付きのままかぶせれば良いのに、洗ってかぶれば短命になければそれで良いですか、と申し上げた。

鷲見家由緒

頼保武蔵権守

建長３（1252）年５月１２日(宗尊親王、将軍となる。日蓮宗はじまる。)

　右の者、鷲見加賀守頼保と改称する。

　　鷲見家

　天正16(1588)年、鷲見兵輔、後十左衛門　大島村百姓

　保房喜平　加賀国金沢に住む。女・白鳥村渡辺治右衛門妻

　郡上郡目城居住の人　東下総守

　向鷲見村にあり・穴洞村にあり

　当国西牧谷にあり